

両大戦とアフリカ人の「血税」

おやさと研究所教授
森 洋明 Yomei Mori

赤道直下の高温多湿なコンゴでは、一年を通じて蚊に悩まされる。都市部でも乾季（6月から8月）になると、ゴミで詰まった側溝に水たまりができ、蚊の格好の発生源となる。蚊は人間以外で最も殺人をしている生き物だと言われているが、なかでも蚊が媒介するマラリアは、熱帯や亜熱帯地域で年間3億人近くの患者を生み、約50万人以上の命を奪っている。そしてその9割以上がサハラ砂漠以南のアフリカなのである。

こうした状況を反映してか、コンゴでは蚊をテーマにしたユニークな歌が存在する。ZAO（ザオ）という歌手が歌っていて、曲名はずばり『Moustique』（蚊）。歌のなかで蚊に対して「bandit」（悪党）「salaud」（げす野郎）「assassin」（殺人者）などと罵倒し、「お前が、マラリアや死、そして貧窮を引き起こす」「多くの死者を近隣にもたらし、通夜が絶えることがない」と、社会の現実を描写する。

このZAOの歌は、この他にも男女関係やアルコール依存などコンゴ社会のさまざまな問題をテーマとし、そのなかには政治的なものもある。それらをコミカルなタッチで歌うところに彼の人気の秘密があるのかもしれない。その彼のレパートリーに『Ancien Combattant』（退役軍人）がある。これは第一次、第二次世界大戦にアフリカから従軍した人たちのことを歌っている。

Moi, je suis ancien combattant（私は退役軍人である）

J'ai fait la guerre mondiaux（私は世界大戦をした）

軍服を着た彼は、おどけた動きで敬礼し、歌を通して従軍した兵士の体験を語り、戦争は良くないと訴える。「la guerre mondiaux」といったフランス語として文法的に間違った表現には、退役軍人の語り口のリアリティが感じられる。

20世紀前半に勃発した両大戦は、ヨーロッパの植民地下にあったアフリカやアジアも巻き込んだ戦争でもあった。コンゴからも多くの人が連合軍に参加し、フランス軍として激戦地に送られている。第一次世界大戦では、ドイツ領だった南西アフリカ（現在のナミビア）や東アフリカ（現在のタンザニア、ルワンダ、ブルンジ）などで、イギリス軍やベルギー軍と交戦となった。ドイツは敗戦とともにそれらの領土を失った。それまでドイツ領だったカメルーンも同じで、終戦後のヴェルサイユ条約によって北西部がイギリスに、南東部がフランスによる委任統治領となる。アフリカにとっては、ヨーロッパの戦闘に巻き込まれた上、突然「家主」が変わったり、勝手に分断されたりしたのである。

フランスはこの両大戦時に、積極的に植民地からの兵士や労働者を本国に受け入れている。その最大の理由が、フランスが他のヨーロッパ諸国に先駆けて、出生率が低くなったからだ。実際、19世紀にはドイツやイギリスに人口が抜かれていて、兵士や産業を支える労働者の不足が大きな問題となっていた。第一次世界大戦にフランス植民地から動員された兵士の総数は、60万人とも言われている。

もっとも、フランスが黒人による兵士を組織したのは、この第一次世界大戦のときではない。19世紀に奴隷貿易を行っていた頃からすでに、その貿易の拠点となっていたセネガルで「セネガル狙撃兵」（Les tirailleurs sénégalais）と呼ばれる部隊を組織していた。奴隷貿易が廃止になってからも、アフリカにおける戦力維持のためにこの部隊は維持され、兵士のなかにはセネガル出身でない者もいた。1914年には15,000人の兵士がいたようだ。

第一次世界大戦時では、植民地で兵士を募集したもののそれほど集まらなかったため、従軍後のさらなる好条件を提示したり、強制力を伴った徴兵を行ったりした。植民地のなかには強制的なやり方に反抗する動きもあったが、圧倒的な武力の差でねじ伏せられた。『Ancien Combattant』が含まれているその武力として現場で活躍



したのがセネガル狙撃兵だった。アフリカ人で構成されるこの部隊は、植民地下のアフリカにおけるさまざまな局面で、フランスのために戦った。

ヨーロッパで「黒い戦力」と呼ばれたアフリカ人の兵士に対しては、多様な言説があったようである。アフリカ兵を推進する側は、彼らの有用性を強調し、その頑強な身体は寒い気候にも耐えうると宣伝した。また「古来から戦闘を繰り返してきた」というアフリカ観を作り出し、彼らが好戦的であり、痛みにも強いなどと訴えた。一方、アフリカ兵に慎重な姿勢を取る側は、彼らは簡単にパニック状態に陥り、統率がとれないと指摘し、こうした従軍を通じて彼らが権利を主張し出すことを危惧した。実際、戦場に送り出されたアフリカ兵士は、慣れない気候の上、十分な訓練も受けていなかったこともあり、大きな兵力とはならなかったようだ。

ただ、アフリカ人にとっては、徴兵とはいえ国際舞台に出るようになったことも事実で、それは植民地支配におけるそれまでの「絶対的存在」であった白人（ヨーロッパ人）像を揺がすことになる。また、アフリカのさまざまな地域から集められたことで、他地域で同じ境遇の人たちと出会うことになり、非支配者たちがそれぞれの経験や知識、情報などを共有する機会もなった。そしてそれは、アフリカ人に新たな世界観を醸成させ、やがて「アフリカ人」というアイデンティティを生み出すことになる。さらには、黒人の権利拡大や植民地からの独立へとつながっていく。

ZAOの『Ancien Combattant』の歌詞には、「私はフランス人を殺した」の後に「私はドイツ人を殺した」と続く。そこには、敵対する両国の双方に荷担しなければならなかったアフリカ全体から見た視点があるのかもしれない。

冒頭の『Moustique』には、「蚊よ、お前はヨーロッパ人には優しく、アフリカ人は刺す人種差別者だ」というところがある。アフリカ人だけが蚊に血を吸い取られるという、不条理を訴えているのだろうか。ただ、植民地統治を進める上で、さまざまな理由でアフリカに入植したヨーロッパ人のなかには、それまで経験しなかったマラリアなど、熱帯性の風土病で命を落としたものも少なくなかったのではないだろうか。それでも、ヨーロッパ人同士、言い換えるとアフリカにおいて絶対的支配者の白人同士の戦いに巻き込まれ、命をかけて「血税」を支払ったアフリカ人の数には到底及ばない。その歴史はまた、現在も蚊に血を吸われ続け、マラリアで苦しむ状況にあるアフリカと重なって見えてくる。